Osaka University Knowledge Archive

Title	2023年度　意匠学会賞選考結果報告
Author(s)	伊原, 久裕
Citation	デザイン理論. 2024, 84, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97661
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

2023 年度　意匠学会賞　選考結果報告

学会賞選考委員会
委員長　伊原久裕

受賞者

廣田　孝 氏

受賞業績

『竹内栖鳳と髙島屋 ── 芸術と産業の接点』（2023）の刊行とそれに関する一連の研究

廣田氏による『竹内栖鳳と髙島屋 ── 芸術と産業の接点』（2023）は「何が京都画壇に近代化をもたらしたか」という問いのもと，竹内栖鳳の画業を多面的，実証的に解明したものである。栖鳳は西洋画の写実を日本画に導入し，特に動物を生き生きと描くことで知られ，京都画壇の筆頭としての地位を確立した。本書は彼の研鑽の原点が実は髙島屋の輸出向け染織作品の下絵制作にあること，したがって，それが京都画壇の近代化に関わっていることを論証している。生活費稼ぎのアルバイトと考えられていた髙島屋画室での活動からは芸術と産業の近代化に生きる新たな芸術家の姿が見える。これは近年研究されている百貨店における大衆消費文化の動向とも共鳴し，デザイン史研究の前進におおいに寄与するものだと言える。

意匠学会賞に相当する成果は特に「第四章　芸術と産業の接点」に顕著である。ここでは髙島屋が画室と染織工房を設置して築いた日本画家と職人の共同作業の仕組みを整理し，芸術と産業の接点の様相を図式的に示している。栖鳳の独創性を見据えるために髙島屋が製作した『刺繍参考画集』，および，『貿易部アルバム』の図版を通じて栖鳳の下絵を考察し，背景の省略，パーツの加除・置換，構図の借用応用，図版の圧縮と合併といった具体的な創作の手法を明らかにしている。これらは芸術と産業の接点で生じた意匠（デザイン）の様相を明らかにしている。さらに，本書は栖鳳の才能が彼の個人的な研鑽によって育まれただけではなく，関係者の一体感の中で育まれたものでもあることを冷静に見据えている。例えば，髙島屋の新七が栖鳳たちを「画工」とは呼ばず，「画家」としてその創造性を尊敬していたことに言及し，栖鳳と髙島屋，もしくは，芸術と産業の公平な関係の成立をも浮き彫りにしている。

「第四章　芸術と産業の接点」以外でも多くの知見が記述されており，デザイン理論の

進展にとってきわめて有意義な内容になっている。例えば,「第五章　一九〇〇年パリ万国博覧会」は栖鳳の創作がパリ万博への出品を通じて飛躍する様子を描いている。日本には存在しなかったファイン・アート（美術）とアプライド・アート（応用美術＝工芸）の峻別に遭遇しつつも髙島屋の刺繍製品はその卓越した表現によって日本政府関係者，フランス政府関係者から注目された。ここで本書は髙島屋の代表的作品となった栖鳳の「波に千鳥図」下絵（明治 32 年）に注目しているが，実際に「波に千鳥図」下絵を再現するという方法によってその制作過程を推察し，栖鳳の創作に迫っているところは特筆すべきであろう。なお，この「波に千鳥図」下絵は著者が新たに発見したものであり，近代の日本画に関する研究に重要な史料をもたらした。その他の各章にもさまざまな知見が凝縮しており，その課題設定，研究手法，論理構成のいずれも学ぶところが多い。

廣田氏は本書につながる一連の研究を本学会で公表しており，大会および，学会誌への貢献が顕著である。本書の刊行はその成果をまとめているため，学術的な意義に加え，本学会にとって特に意義深いものになっている。以上により，本書の刊行とそれに関する一連の研究は意匠学会賞に相当する優れた成果であると判断できる。

なお，学会賞の選考は会員からの推薦をふまえて実施している。今回は学会賞委員から推薦があり，3 月 21 日に委員会を開催し協議の結果，全員一致で廣田氏の選考に至った。